

要 旨

他者との関係性をテーマとする作品の構想

——ソーシャリー・エンゲイジド・アート（SEA）をふまえて——

和田 美咲

他者と場を共有し対面することを基本に発展してきた人間と人間のコミュニケーションは、IT 機器の登場によりそのあり方に大きな変化が生じた。2020 年 2 月、中国の武漢から世界へ感染が拡大した新型コロナウイルスにより経済や公衆衛生のみならず、コミュニケーションのあり方や人と人の関わりが改めて問われている。目に見えない恐怖の中ロックダウンの処置が取られ、できる限りの外出と人との接触の自粛が求められた。現在もお人との接触が制限されており、IT 機器とりわけインターネットを介したコミュニケーション方法が日々の他者との関わりにおいてかつてないほどの位置を占めるようになった。

本研究では、作品《共にいることの可能性、その試み、その記録》において作家・田中功起が取り上げた「お互いばらばらでありながら共にいることは出来るのか」という問いと「異なる私たちが共にある可能性」の探求を、新型コロナウイルス感染症パンデミックの現状におきかえて再考する。感染拡大防止のため、人との直接的な接触が困難な状況によりインターネットを介したコミュニケーションが他人との交流の大部分を占める今日。この身体性の乏しい関係性において他者と「共にあること」の新たな可能性の一例となる作品を構想する。

第 1 章では、コンセプチュアル・アートの中に登場した人間と人間の関係性を主題とするソーシャリー・エンゲイジド・アートについて、そのアート群の歴史と現在の定義、形式について紹介する。

第2章、作家・田中功起は東日本大震災の際に一時的に発生した共同体とその儚さへの気づきを契機に、「お互いばらばらでありながら共にいることは出来るのか」という問いを作品《共にいることの可能性、その試み、その記録》の中で試行した。これは、過去に移住という経験を持った人物が共同生活を送りながら作家の計画したワークショップに参加する取り組みである。作家レベッカ・ソルニットが「災害ユートピア」と呼ぶ、災害時に一時的に実現する理想的共同体を再現する試みであるとも捉えられる。作品研究と「災害ユートピア」において挙げられる共同体維持の問題について、田中の作品からどのような可能性が見いだせるか考察する。

第3章、本論で参考とする作品《共にいることの可能性、その試み、その記録》は、参加と人々の語りや対話を重視するであり、ワークショップの形式が集団心理療法エンカウンター・グループに類似する。このことから、同カウンセリングのアプローチと意図、SEA との違いについて考察した。また、語るという作業と関係性について、独自の方法論を持つナラティブ・アプローチについてまとめた。

第4章においては、インターネットを介したコミュニケーションの歴史とコミュニティやコミュニケーションの成立にあたっての課題を提示する論説に触れ、インターネットを介したコミュニケーションの新たな可能性を模索する。

これらをふまえ第5章では、自身の作品構想について述べる。作品を通して普段とは異なるインターネットを介したコミュニケーションを意図的に生み出すことから、田中の問い「お互いばらばらでありながら共にいることは出来るのか」に対する新たな答えの模索を試みる。